

# 男性用性的欲求尺度の作成と信頼性・妥当性の検討<sup>1)</sup>

下坂 剛\*

## Development of Sexual Desire Scale for Men and Examination of Its Reliability and Validity

Tsuyoshi SHIMOSAKA\*

This research aims to collect experiences of feeling a sexual desire from men during face-to-face interviews to make a sexual desire scale for men (SDS-M) and then examine its reliability and appropriateness. The interviews were carried out with married and unmarried 11 men in their 20s to 40s. In addition, online surveys were conducted among 300 married and unmarried men in their 20s to 40s, using the SDS-M. With the exclusion of data on 39 participants who said they had never experienced sexual intercourse, data on 261 men were put to a factor analysis. As a result, the SDS-M discovered four structural factors: "satisfaction with sex", "satisfaction with masturbation", "desire to seek advice on sexual distress", and "recognition of sexual debility". The discovery verified the reliability of the SDS-M from the aspect of internal consistency and its appropriateness from construct validity. "Desire to seek advice on sexual distress" was stronger among the unmarried than among the married. "Recognition of sexual debility" was conspicuously reported by men in their 40s.

**key words:** sexual desire scale for men, adulthood, reliability and validity, self-esteem, heterosocial anxiety

### 問題と目的

#### はじめに

男性にとって性的欲求はどのように体験されるだろうか。妊娠中の夫婦に関する調査では、妊婦の51.7%、夫の30.3%が「そばにいればいい」と答えたものの、夫の32.3%が性生活に何らかの不満を抱えていた(大井・富田・高村, 2002)。夫からみれば妊娠している妻は悪阻などの身体的な大変さを身近に感じるにもかかわらず、自らの性的欲求は衰えないため、ある意味で性的欲求は「厄介な」ものになりや

すい。一方、発達のみにみると性の解放・性の若年化が大学進学者で進んでおり、初交年齢の低年齢化も進行し、特定のパートナー以外との性交経験率も高い比率で推移している(張谷, 1998; 2000)。多くの青少年が年少の時期に性行動を経験している現状にある。中高年の女性に尋ねると、性に関する夫との会話で「何でも話せる」と回答したのは4割、性交渉の意識として「お互いの信頼が深まる」「愛情を深める」と回答したのはそれぞれ6割、性生活の頻度は週1回以上が36%、月1~2回が40%、性交に要する時間は1回20~30分が7割、「性的欲求に夫が応えてくれ

<sup>1)</sup> 本研究はJSPS科研費(25590181)の助成を受けた。

\* 四国大学生活科学部人間生活科学科

Shikoku University, Department of Human Life Science, Faculty of Human Life Science, Furukawa, Ojin-cho, Tokushima 771-1192, Japan

ない」と回答したのが3割、「夫との不一致感」や「夫が満足しないのでは」と回答したのが4割、夫の性的欲求が「煩わしい」「拒んだことがある」と回答したのはともに5割であった(斎藤・木村, 2000a, 2000b)。長年の夫婦関係における性生活は、性的欲求の充足のみならず、互いの心理的なつながりを維持するコミュニケーションとしての役割も兼ねているといえよう。また、男性にとって性的欲求の対象は必ずしも女性に限らず、男性であることもある。いわゆるセクシュアリティの観点でいえば、男性自身が性のあり方を認知・評価し、それにもとづいて行動し、その多様性を他者が認めることも重要になってきている(湯川, 2015)。性の問題は非常に多岐に渡り、男性にとっても重要な生理的欲求の一つであるにもかかわらず、社会的にはタブー化されやすく、残念ながらわが国では教育現場での性教育や司法・犯罪領域での性犯罪抑止に寄与するほど十分なデータが蓄積されていないのが現状である。

### 性的欲求の定義

心理学領域では性的欲求の研究はそれほど多くはなされておらず、明確な定義がある訳ではない。Spector, Carey, & Steinberg (1996) は性的欲求を“性的活動への興味に関わっており、主に認知的変数であって、性的刺激への考えや反応の強さの量で測定できる。性的欲求は行動ではなく、性交や自慰のような直接的性行動を観察して測定するものではなく、個人が性的機会を求め、受け入れたいと思う考えに伴う欲求である”と定義している。田口・桐生・伊藤・池田・平 (2007) は性的欲求を“性的刺激や性的活動への関心が異性、同性を問わず、またその対象が人だけでなく、特定の物や状態へも方向づけられる観念の強さによって測定できる変数”であると定義している。本研究ではこれらの定義を参考にした上で、性的欲求は(1)性的刺激の強さや体験や感情を言語化した認知的変数であること、(2)性的刺激を受ける対象は異性だけでなく、同性や物など多様性を想定されること、(3)性交や自慰の回数といった直接的行動の頻度ではなく、個人的あるいは他者との性的関わりによる満足を希求する感覚であること、と定義する。

### 男性における性的欲求の研究の意義

1998年から2008年までの警察統計によると日本の性犯罪者は男性が99.3%を占める(渡邊, 2010)。

女児や成人女性へのレイプ、監禁や殺人に至る例もあるし、男性においては痴漢や盗撮などで検挙され、社会的地位を失うケースも多い。特にその男性が教師や警察官、公務員など一定の社会的地位をもつ場合、社会的信用を失墜させた行為として厳しく批判される。彼らは少なくとも自らの性行動をコントロールできないという点で共通しているが、その凶悪性と被害者の受ける被害の大きさはさまざまである。男性は社会的地位を失うリスクを冒してもなぜ被害女性への性犯罪を行ってしまうのか。性犯罪の要因の一つが性的欲求であると仮定するならば、男性がどのような性的欲求を感じているかを明らかにしなければ、彼らが性犯罪に至る社会的文脈は明らかにならないだろう。そこに本研究が男性の性的欲求を検討する意義もあるといえる。

### 性的欲求に関する研究の動向

Spector *et al.* (1996) は“Sexual Desire Inventory”を開発し、大学生男女を対象とした調査で「2者(Dyadic)」及び「単独(Solitary)」の2因子からなる尺度を作成した。田口他(2007)は、性犯罪抑止の観点から男性用性的欲求尺度を開発し、成人男性を対象に「日常性欲」「ホモヘテロ性欲」「男性器志向性欲」「性交志向性欲」「特異性欲」の5因子からなる尺度を作成した。その他、五十嵐(2002)は高校生男女において性交を行う動機として「愛情」「周囲との比較」「安易な考え」「焦燥感」の4因子による尺度を作成している。高坂・澤村(2017)は大学生男女を対象にセックス(性行為)をする理由を分析し、「自己の探求」「周囲からの圧力」は男子の方が高く、「相手からの要望」は男子の方が高いことを示している。このように、性的欲求や性行動に関する尺度はいくつかみられるものの、本研究で定義したように一般の成人男性が日常生活の中で体験するような性的欲求を測定する尺度はいまだ開発されていない。

また、性的欲求と関連する構成概念について、和田・西田(1992)は、大学生の「性的な寛容さ」について男女ともに多様な差がみられることに加え、男性の性体験レベルは、年齢・大学の成績・自由なお金・恋人の有無・家庭の経済状況が規定因とし、社会経済的地位も含めた自己のあり方が性体験と関連していることを示唆している。神蘭・黒川・坂田(1996)は、現在恋愛関係にある者は、自尊感情が高いことを示している。また、風間(2016)は中学生を

対象とした性教育を実施したところ、自尊感情が上昇したことを示しており、性的な問題について知識を得て考えることは、自分自身を受け入れるという意味での自尊感情とも関連しているといえる。一方、Leary (1983) は、異性への不安が高いと異性との個人的付き合いを回避するので、満足のいく性的経験の可能性を失っており、セックスの経験も少ないという。Barlow (1986) によればデート不安の高い男性は、性行動の際に早漏や性的不能になりやすいという。これらのことから主な性的対象としての異性への不安は、異性とのセックス体験を抑制することが考えられる。進化心理学の立場から、藤崎(2011)は、子をもつのが当然という規範がなくなりつつあること、結婚しても性行為をしない夫婦もいること、男性の性質の特質として「ミソジニー(女性を嫌うこと)」等を指摘しており、性的対象として異性を求めない男性のあり方は視野に入れる必要がある。このように自己への肯定的な評価としての自尊感情や、対人場面における異性不安は、それぞれ自己に関連する認知的変数であるが、これらが性的欲求と異なる関連性を示すと予想される。

## 研究方法

### 本研究の目的

本研究では、成人男性が認識した性的体験を測定するため、インターネット調査による自己評定の質問紙調査とした。主に社会人として相応のストレスを抱える日常生活を送る中で、男性自身に性的欲求に関する体験について面接調査を行い、性的欲求に関する項目を抽出し、抽出された項目をもとに成人における男性用性的欲求尺度を作成する。有職者としての日常生活の性的体験という観点から成人男性の性的欲求を測定し、男性の性的体験についての知見を提供することを目的とする。

### 倫理的配慮

本研究は、所属機関の研究倫理審査委員会において承認を得たうえで実施した。調査にあたり、調査への参加は任意であること、協力を拒否、中断した場合でも不利益を被ることがないこと、調査内容は個人が特定されないよう匿名化され統計処理を行うこと、結果は学会などにおいて個人を特定されない形で公表する可能性があることについて文面および口頭で説明を行った。その後、調査対象者に調査の同意

を得て調査を実施した。

## 予備調査

### 目的

成人男性を対象とした面接調査により、男性の性的欲求体験の収集、分類を行い、成人期における男性用性的欲求尺度の構成項目の選出を行う。

### 方法

**調査対象** 有職者の成人男性 11 名(23 歳—44 歳、平均年齢 33 歳)。20 代 4 名(既婚 2 名)、30 代 5 名(既婚 3 名)、40 代 2 名(既婚 1 名)であった。

**調査時期および手続き** 2013 年 7 月—10 月であり、面接の所要時間は約 60 分であった。面接内容は調査対象者の承諾を得たうえで IC レコーダーに録音し、文字起こしをした上で KJ 法により分類した。

**調査項目** a. 性行動(「性行動で満足する場合、それはどのような気持ちだと表現できるでしょうか」等)、b. 性的欲求の認識(「ふだんの生活でどのようときに性欲を感じやすいですか」等)、c. 性道徳観(「性欲や性行動についてはいけないことが分かっている、やってみたくて魅力を感じることはありますか」等)、d. 性行動にまつわる葛藤(「性欲に関する悩みを他の人に相談したり、悩みを共有することはありますか」等)の 4 つであった。

### 結果と考察

得られた記述データから、8 のサブカテゴリ、それらを 4 つのメインカテゴリにそれぞれ分類した。その上で、それぞれ 5—8 の合計 51 項目を作成した。各カテゴリと項目例を Table 1 に示す。メインカテゴリ〈対他〉はサブカテゴリ「パートナーへの配慮」と「セックスでの満足」、〈対社会〉は「社会的拘束感」と「悩み相談欲求」、〈対自〉は「自慰での満足」と「性欲の強さ」、〈性的葛藤〉は「浮気願望」と「性的嗜好」とでそれぞれ構成されている。

## 本調査

### 目的

成人男性を対象としたインターネット調査によって、男性用性的欲求尺度の信頼性、妥当性の検討を行うことを目的とする。

### 方法

**調査対象** 成人男性 300 名、平均年齢 35.7 歳(標準偏差 8.01)、20—49 歳の範囲。有職者は 80%(正社

Table 1 カテゴリ分類表

カテゴリ	項目例	カテゴリ	項目例
〈対他〉		〈対自〉	
セックスでの満足	セックスではパートナーから自分が男として認めてもらえる感じがする 同じベッドで肌をふれあうことで満たされるものがある セックスをすると、あたたかい感じがして満足する	自慰での満足	パートナーとのセックスよりも自慰の方が満足できる 自慰は面倒がなく気楽でよいと思う 自慰は相手に気をつかわなくてよいので楽だと思う
パートナーへの配慮	相手が疲れているときのセックスは控えるようにする パートナーが生理中のときの性行為は我慢する セックスのときはパートナーの快感を優先することが多い	性欲の強さ	自分の性欲は人並み以上にあると感じる 性的欲求を発散しないと眠れないときがある 仕事で疲れて性欲まで体力が残っていない*
〈対社会〉		〈性的葛藤〉	
悩み相談欲求	性に関する悩みは友達といつも相談しあっている 性の体験の話は、酒の席などで表面的なことを言い合うぐらいしかしない* 性に関することを誰かに相談することはない*	浮気願望	仕事中でも好みの女性をみかけると性欲を感じて困ることがある パートナー以外にも性欲を抑えるのが難しいと感じる 浮気はいけないと思うが、ついしてしまう
悩み相談欲求	性犯罪事件のニュースをみるとかなり気をつけようと思う 法律を破る性行為をして人生を棒に振るのは愚かなことだと思う 痴漢冤罪の事件などをみると怖い	性的嗜好	大人の人よりも中学生など思春期の人たちに性欲を感じる SMのシチュエーションだととても性的に興奮する 少し変わったことでなければ性的に興奮しにくい

\*は逆転項目

員 68%), 学歴は高卒 31%, 大卒 51%, 結婚歴 (有無) × 年代 (20代・30代・40代) の 2 要因を統制するため 6 つのセルに 50 名ずつとなる割付が行われた。

**調査時期および手続き** 調査は 2014 年 2 月に実施した。インターネットのモニター調査会社に Web 調査を依頼し、匿名での Web 上における質問紙調査を実施した。調査時には、モニターとなる調査対象者に画面上で、性的な内容に関する調査内容であることを説明された上で、同意した場合に回答が行われるシステムとした。

**調査内容** a. フェイスシート項目は、年齢、最終学歴、就業状況 (正社員その他の雇用形態)、結婚状況 (既婚、未婚、その他)、恋人の有無 (未婚者のみ)、セックス経験の有無、性風俗利用経験の有無、男性への性的欲求の有無。b. 予備調査で新たに作成した男性の性的欲求を表す 51 項目 (Sexual Desire Scale for Men : 以下, SDS-M とする)。性的欲求の対象は、多様なセクシュアリティに配慮して「パートナー」と統一した。回答方法は「あてはまる」(5 点)、「ややあ

てはまる」(4 点)、「どちらともいえない」(3 点)、「ややあてはまらない」(2 点)、「あてはまらない」(1 点) の 5 段階評定である。c. 山本・松井・山成 (1982) による自尊感情尺度 10 項目, 単一因子, 5 段階評定。d. 富重 (1994) による異性不安尺度 9 項目, 単一因子, 5 段階評定。

**分析方法** 分析には統計ソフト HAD ver.16 (清水, 2016) を用いた。

## 結果

**人口統計学的質問** 最終学歴は、中学 8 名 (2.67%), 高校 93 名 (31%), 大学 153 名 (51%), 大学院 18 名 (6%), その他 28 名 (9.3%) であった。就業状況は、正社員 203 名 (67.7%), 契約社員 12 名 (4%), 派遣社員 6 名 (2%), パート・アルバイト 19 名 (6.3%), 離職中 17 名 (5.7%), 就業経験なし 16 名 (5.3%), その他 27 名 (9%) であった。結婚歴は有無が 150 名ずつで割付されているが、現在の婚姻状態は、結婚経験ありと回答した者のうち 3 名離婚経験があり、現在は独身と回答していた。現在結婚している 147 名のうち子どもがいると回答したのは

Table 2 SDS-M の因子分析結果 (最尤法・プロマックス回転)

項目	F1	F2	F3	F4	平均	標準 偏差
セックスでの満足 ( $\alpha = .806$ )						
7. セックスをすると、あたたかい感じがして満足する	.783	.007	.036	-.071	3.82	0.90
5. セックスの際はパートナーに感謝したい気持ちになる	.750	-.053	.006	.098	3.55	0.89
8. セックスではお互いの愛情を確かめ合えた感じがして満足する	.670	-.111	-.027	.060	3.82	0.86
3. 同じベッドで肌をふれあうことで満たされるものがある	.608	.059	-.038	-.008	3.77	0.95
38. 普通のセックスが一番興奮する	.514	.006	-.006	.243	3.44	0.85
4. セックスの後は心地よい疲労感がある	.514	.075	-.103	-.119	3.75	0.86
2. セックスではパートナーから自分が男として認められる感じがする	.503	.113	.087	-.022	3.44	0.91
自慰での満足 ( $\alpha = .743$ )						
13. 自慰は相手に気をつかわなくてよいので楽だと思う	.069	.843	-.155	.008	3.69	0.94
12. 自慰は面倒がなくて気楽でよいと思う	.065	.813	-.107	.079	3.70	0.89
9. パートナーとのセックスよりも自慰の方が満足できる	-.306	.575	.070	.185	2.69	1.01
33. いろいろな制服をきた人に性欲を感じやすい	.060	.474	.158	-.097	3.02	1.19
悩み相談欲求 ( $\alpha = .705$ )						
47. 性に関する悩みは友達といつも相談しあっている	.019	-.103	.843	.134	2.18	1.08
49. 性に関することを誰かに相談することはない *	-.007	-.059	.658	-.068	2.36	1.09
46. 性に関する体験を友達と話し合うことはあまりない *	.019	-.120	.547	-.047	2.51	1.14
51. 性に関する悩みを相談できる人がいたらいいのと思うときがある	.121	.230	.428	.159	2.77	1.08
36. 少し変わったことでなければ性的に興奮しにくい	-.220	.162	.427	-.099	2.44	1.00
性欲減退の自覚 ( $\alpha = .659$ )						
23. 仕事で疲れて性欲まで体力が残っていない	.004	.069	.097	.699	2.85	1.08
39. 次の日に響きそうなときはセックスや自慰は控える	.118	.019	.023	.591	3.16	1.05
19. 若い頃に比べて性欲が衰えてきた感じがある	.048	.095	-.062	.554	3.47	1.18
20. 自分の性欲は人並み以上にあると感じる *	-.199	-.285	-.208	.470	2.70	0.95
	因子間相関	F2	F3	F4		
	F1	.097	.036	-.267		
	F2		.199	.238		
	F3			-.089		

\*は逆転項目

39名(26.5%)であった。独身者のうち現在恋人がいると回答したのは45名(29.4%)、セックス経験有りと回答したのは261名(87%)であった。性風俗利用経験が有りと回答したのは155名(51.7%)であった。男性への性的欲求の有無について、有りと回答したのは6名(2%)であった。

**探索的因子分析** まず300名のうち39名がセックス経験無しと回答した。本研究のSDS-Mは、セックスの経験が結果に大きく影響すると考えられるため、今回はこの39名のデータを除外し、以後は、セックス経験がある261名のデータで分析を行うことにした。この261名のうち無職者は大卒2名のみであり、これ以降の分析データの99%は有職者であるといえる。

項目分析の結果、6項目で天井効果(項目の平均値+標準偏差が評定上限値5を上回った場合)が認め

られ、2項目でフロア効果(項目の平均値-標準偏差が評定下限値1を下回った場合)が認められた。以後これら8項目を分析から除外し、残りの43項目について最尤法、プロマックス回転による因子分析を行った。固有値の減衰状況は、1因子から順に、6.69、4.26、3.49、1.88、1.64であり、5因子以下の固有値の差は少なかった。そのため因子の解釈可能性にもとづき、4因子解を採用した。1つの因子に対して40未満の因子負荷量を示した項目を除外し、最終的に20項目で再度因子分析を行った。結果をTable 2に示す。累積寄与率は4因子で54.06%であった。第1因子はパートナーとのセックスによる性的欲求の充足や満足感を表しているため「セックスでの満足」因子と命名した。第2因子は自慰で手軽に性的刺激を得つつ性的欲求を充足することを表しているため「自慰での満足」因子と命名した。第3因子は性に関

する悩みを他者に相談・共有したい気持ちを表しているため「悩み相談欲求」因子と命名した。第4因子は性的欲求が減退していることへの自覚を表しているため「性欲減退の自覚」因子と命名した。因子間相関は  $r = -.267 \sim .238$  であった。次に内的整合性を検討するため  $\alpha$  係数を算出した。「セックスでの満足」では  $\alpha = .806$ , 「自慰での満足」では  $\alpha = .743$ , 「悩み相談欲求」では  $\alpha = .705$ , 「性欲減退の自覚」では  $\alpha = .659$  であった。各因子の下位尺度得点を、それぞれ「セックスでの満足」, 「自慰での満足」, 「悩み相談欲求」, 「性欲減退の自覚」の得点とした。

**自尊感情と異性不安との関連** SDS-M の各下位尺度得点と、自尊感情および異性不安の各得点との相関係数を検討した (Table 3)。「セックスでの満足」と自尊感情は  $r = .235$  で有意な正の相関 ( $p < .01$ ), 「自慰での満足」と異性不安は  $r = .185$  で有意な正の相関 ( $p < .01$ ), 「悩み相談欲求」は自尊感情と  $r = -.153$  で有意な負の相関 ( $p < .05$ ) をそれぞれ示した。

**婚姻状況と年代による差異** 婚姻状況について3名が離婚経験有と回答した。現在の婚姻状況で統制するため、これら3名を除外して以下の分析を行った。婚姻状況 (既婚・独身) と年代 (20代・30代・

40代) の2つの要因による SDS-M の各下位尺度得点について、二要因分散分析を行った (Table 4)。「セックスでの満足」得点, 「自慰での満足」得点は主効果, 交互作用ともに有意差はみられなかった。「悩み相談欲求」得点は, 婚姻状況 ( $F_{(1,252)} = 6.18, p < .05$ ) と年代 ( $F_{(2,252)} = 8.56, p < .01$ ) それぞれについて主効果がみられ, 「悩み相談欲求」得点は既婚者より独身の方が高かった。また, Holm 法による多重比較の結果, 「悩み相談欲求」得点は20代・30代の方が40代より高かった ( $MSe = 0.49$ )。また, 「性欲減退の自覚」得点は年代 ( $F_{(2,252)} = 4.35, p < .05$ ) で主効果がみられ, Holm 法による多重比較の結果, 「性欲減退の自覚」得点は30代より40代の方が高かった ( $MSe = 0.55$ )。

考 察

本研究の目的は、成人男性を対象としたインターネット調査によって、SDS-M の信頼性、妥当性の検討を行うことであった。成人男性を対象とした調査から、SDS-M は「セックスでの満足」, 「自慰での満足」, 「悩み相談欲求」, 「性欲減退の自覚」の4因子からなることが明らかになった。4つの下位尺度の内的整合性、自尊感情と異性不安との関連性の検討から構成概念妥当性についても確認できた。

SDS-M の信頼性と妥当性

内的整合性の観点からの信頼性については、内容的妥当性については、「セックスでの満足」, 「自慰での満足」, 「悩み相談欲求」の3つの下位尺度で  $\alpha$  係数が.70以上であったが、「性欲減退の自覚」は  $\alpha$  係数が.70に満たなかった。その点で本尺度は一部で十分な内的整合性を満たさなかったといえる。項目

Table 3 SDS-M 各下位尺度と自尊感情及び異性不安の相関

SDS-M	自尊感情	異性不安
セックスでの満足	.235**	-.043
自慰での満足	-.121	.185**
悩み相談欲求	-.153*	.039
性欲減退の自覚	.089	-.114

(N=261) \*  $p < .05$  \*\*  $p < .01$

Table 4 婚姻状況と年代による SDS-M 各下位尺度の二要因分散分析

SDS-M	婚姻						分散分析		
	20代		30代		40代		主効果		交互作用
	(N=50)	(N=50)	(N=47)	(N=28)	(N=42)	(N=41)	婚姻	年代	
セックス満足	3.67 (0.68)	3.59 (0.53)	3.66 (0.61)	3.61 (0.77)	3.67 (0.56)	3.75 (0.52)	n.s.	n.s.	n.s.
自慰満足	3.38 (0.90)	3.19 (0.81)	3.10 (0.69)	3.52 (0.75)	3.25 (0.66)	3.37 (0.67)	n.s.	n.s.	n.s.
悩み相談欲求	2.56 (0.80)	2.47 (0.71)	2.11 (0.71)	2.83 (0.62)	2.59 (0.65)	2.39 (0.64)	6.18*	8.56**	n.s.
性欲減退の自覚	3.20 (0.78)	2.84 (0.78)	3.13 (0.71)	3.00 (0.67)	2.89 (0.63)	3.23 (0.85)	n.s.	4.35*	n.s.

注) ( ) は標準偏差。

\*  $p < .05$  \*\*  $p < .01$

作成にあたって、11名の成人男性から面接調査を実施し、20代から40代、既婚者、独身者と幅広く記述が収集され、分類を経て項目が作成されているため、一定の内容的妥当性をもっていると考えられる。次に、構成概念妥当性については、自尊感情が「セックスでの満足」と正の相関を示したが、現在恋愛関係にある者は自尊感情が高い(神菌他, 1996)ことからパートナーとのセックスで満足感が得られると自尊感情が高くなることはうなずける結果である。また自尊感情は「悩み相談欲求」と負の相関を示したが、自尊感情が低いことが悩みにつながる知見があり(永井, 2010)、本研究の結果を支持するものといえる。また、異性不安は「自慰での満足」と正の相関を示したが、既婚者より未婚者で自慰頻度が多い傾向があり(NHK「日本人の性」プロジェクト, 2002)、異性不安のもつ影響力は男性において高く内面の苦悩として経験されやすい(富重, 1999)ことから、独身者に多いパートナーの不在が自慰での満足につながっていると考えられる。以上のことから本尺度の構成概念妥当性が示されたといえる。

#### SDS-Mの婚姻状況と年代による差

SDS-Mのうち婚姻状況で差がみられたのは「悩み相談欲求」であり、既婚者より独身の男性の方が高いという結果であった。森岡(2013)は、男性自身が射精という体験の直後に一種の嫌悪感をもちやすいことを前提とし、こうした意識を変えるには「信頼できるパートナーがいたほうがよいのかもしれない。そのパートナーに、自分の体についての悩みを打ち明け、もしその人がそれを共感的に受け取ってくれるのなら、その人と話し合いながら、解決のための方法を模索する(pp.192)」ことを指摘している。既婚者はパートナーとの親密な関係を構築しやすく、独身者に比べれば特定のパートナーとの継続的なセックスを通じて自らの性的な悩みが軽減されやすいかもしれない。一方で、世代差は「悩み相談欲求」が20代・30代より40代が低く、「性欲減退の自覚」は30代より40代が高かった。NHK「日本人の性」プロジェクト(2002)では20代・30代・40代の性についての関心の程度は55%、39%、29%と加齢に応じて低下している。すなわち、加齢にともなって性に対する関心が薄れ、中年期には性的欲求にまつわる悩みも少なくなっていくことを示唆している。

#### 本研究の限界と今後の課題

本研究の限界として、まず、調査はインターネット調査にもとづいており、匿名であっても職場等で調査を実施した場合のデータとは社会的望ましさの影響により代表値が異なる可能性があることが挙げられる。また、SDS-Mの因子に「性的葛藤」に関する項目が見られなかった点は尺度の内容的妥当性に今後の検討の余地があることを示唆している。次に本研究の課題として、分析では4つの因子構造が見いだされたが、第4因子の信頼性係数が低い点、および安定性の観点からの信頼性を検討することは今後の課題である。また、妥当性については、客観的な基準、例えば実際の性行動の回数などと比較した上での基準関連妥当性の検討はできていない。構成概念妥当性についても相関係数は.20程度と相対的に高いとはいえず、今後検討の余地がある。最後に、本研究で作成したSDS-Mを使用する上では、本研究がインターネット調査にもとづくことを踏まえ、質問内容に社会的望ましさの項目も取り入れつつ、その影響を併せて検討すること、およびSDS-Mは第4因子の信頼性がやや低い点、第3因子までに限定して使用することに留意すべきであろう。今後、これらの限界と課題及び留意点を踏まえつつ、尺度の改訂とデータの蓄積が必要である。

#### 引用文献

- Barlow, D.H. 1986 Causes of sexual dysfunction: The role of anxiety and cognitive interference. *Journal of Counseling and Clinical Psychology*, **54**, 140-148.
- 藤崎康彦 2011 「男性学」と「進化心理学」—「男性学」に「進化心理学」的発想を導入する際の覚書— *コミュニケーション文化*, **5**, 17-27.
- 張谷秀章 1998 大学生の性行動様式の変化に関する研究 *日本健康医学会雑誌*, **7**, 11-15.
- 張谷秀章 2000 大学生の性行動とセーフターセックスの実行に関する研究 *日本健康医学会雑誌*, **9**, 45-50.
- 五十嵐哲也 2002 高校生における性行動に関する研究—高校生が性交を行う動機と性知識を中心に— *教育学研究集録*, **26**, 77-86.
- 神菌紀幸・黒川正流・坂田桐子 1996 青年の恋愛関係と自己概念及び精神的健康の関連 *広島大学総合科学部紀要 IV 理系編*, **22**, 93-104.
- 風間みえ 2016 中学生における生命と性に関する授業の効果 *新潟医学会雑誌*, **130**, 237-243.
- 高坂康雅・澤村いのり 2017 大学生が恋人とセックス(性行為)をする理由とセックス(性行為)満足度・

- 関係満足度との関連 青年心理学研究, **29**, 29-42.
- Leary, M.R. 1983 *Understanding social anxiety: Social, personality, and clinical perspectives* CA: Sage (生和秀敏 (監訳) 1990 対人不安 北大路書房)
- 森岡正博 2013 決定版感じない男 筑摩書房
- 永井 智 2010 大学生における援助要請意図 教育心理学研究, **58**, 46-56.
- NHK「日本人の性」プロジェクト(編) 2002 データブック NHK 日本人の性行動・性意識 日本放送出版協会
- 大井けい子・富田真理子・高村寿子 2002 妊娠期の性生活—妊婦とその夫の性の認識と満足の違い— 日本女性心身医学会雑誌, **7**, 220-225.
- 齋藤益子・木村好秀 2000a 中高年女性の性的生活意識: 第1報 女性心身医学, **5**, 47-53.
- 齋藤益子・木村好秀 2000b 中高年女性の性行動に関する調査: 第2報 女性心身医学, **5**, 54-59.
- 清水裕士 2016 フリーの統計ソフト HAD—機能の紹介と統計学習, 教育, 研究実践における利用方法の提案 メディア・情報・コミュニケーション研究, **1**, 59-73.
- Spector, I.P., Carey, M.P., & Steinberg, L. 1996 The sexual desire inventory: development, factor structure, and evidence of reliability. *Journal of Sex & Marital Therapy*, **22**, 175-190.
- 田口真二・桐生正幸・伊藤可奈子・池田 稔・平 伸二 2007 男性用性的欲求尺度 (SDS-M) の作成と信頼性・妥当性の検討 犯罪心理学研究, **45**, 1-13.
- 富重健一 1994 青年期男子・女子の異性不安に関連する要因 (1) —異性不安尺度・デート不安尺度の作成— 日本教育心理学会第36回大会発表論文集, 228.
- 富重健一 1999 青年期の異性不安に関連する心理社会的諸要因 東洋大学児童相談研究, **18**, 17-31.
- 和田 実・西田智男 1992 性に対する態度および性行動の規定因 社会心理学研究, **7**, 54-68.
- 渡邊和美 2010 性犯罪の加害者—加害者の特徴— 田口真二・平 伸二・池田 稔・桐生正幸 (編) 性犯罪の行動科学—発生と再発の抑止に向けた学際的アプローチ 北大路書房 pp. 137-152.
- 山本真理子・松井 豊・山成由紀子 1982 認知された自己の諸側面の検討 教育心理学研究, **30**, 64-68.
- 湯川隆子 2015 性・性意識の発達を個人差としてとらえる試み: 性別二元性からの脱却 奈良大学紀要, **43**, 175-191.

(受稿: 2018.7.7; 受理: 2018.10.9)